

狂言らいぶ



狂言は、室町時代の日常語による会話劇。
その室町口語は現代日本語の基礎と言われています。
だから時代を超えてわかる！笑える！

今、私たちが演じているこの舞台を
600年前の日本人が観ていたと
想像するだけでワクワクします。
このワクワクドキドキ感を一人でも
多くの方々に感じて頂けたらと思います。

プロフィール

和泉元彌（和泉流）千世宗家



3歳で、「鞍猿」の小猿役で初舞台。その後9歳で狂言最高の格式を持つ「三番叟」を演じるなど、大曲・秘曲・稀曲を異例の若さで次々に演じた狂言界の若きホープ。

24歳で、先代19世宗家・故和泉元秀（重要無形文化財保持者）より、和泉流宗家ののみに許される「子相伝の芸」を継承。以後、映画出演はじめ、司会者や俳優として活躍の場は多岐にわたり、狂言の世界にとどまらず多くの分野からも注目される。「自分を通じて狂言に興味を持つてもらえば幸せ」という姿勢のとおり、彼を通して狂言を知った人も少なくありません。

近年においては、狂言が身近にある芸能になるよう、毎月の自主公演（和泉会・渋谷狂言ライブなど）と共に、全国の自治体主催の公演、学校公演を主軸に活動し、また伊勢神宮を初めとする、奉納狂言も精力的に行なっている。

和泉淳子（日本初女性狂言師）



3歳で初舞台。平成元年、国立能楽堂において「史上初女性狂言師誕生記念公演」を行い、狂言界、初の女性狂言師として注目を集める。

以後、テレビキャスターやCMなどでも活躍し、女性狂言師協会を設立する。

また、長女和泉慶子も「鞍猿」の小猿役で初舞台を踏み、史上初の母親狂言師として、子どもたちへの狂言教育にも精力的に取り組んでいる。

十世・三宅藤九郎



「鞍猿」の小猿役で初舞台。その後、先代9世三宅藤九郎の指名により、10世三宅藤九郎の名跡を継承する。また、和泉淳子とともに女性狂言師としての活躍が認められ文部大臣より感謝状を授かる。